

説教 『あなたのベツレヘムへ行く』 山本護牧師  
 聖書 ルカによる福音書 2:15~21

天使の言葉(ルカ 2:10~12)が、虚ろな羊飼いの日々(2:8)を変えた。変えられた羊飼いは、天使を頼りにせずとも自分たちで決断し行動する者となった(2:15)。そして「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子探し当て(2:16)、「ああ、天使が言った通りだ」と自らの目で確かめてから、天使の言葉を知らせた(2:17)。降誕の御告げをただ鸚鵡返しに伝えたのではなく、自分の責任で伝えたのだ。だが人々は、その話を「不思議に思った(2:18)」。貧しい羊飼いの言葉など信用できん、というのか。羊飼いはいわば被差別民だから「聞いた者は皆～不思議に(胡散臭く)思った(2:18)」のか。そうかもしれない。しかしこの場合は「天使が話した(2:17)」内容それ自体を怪しんだのだろう。つまり「救い主、主メシア(2:11)」が「布にくるまって飼い葉桶に寝ている乳飲み子(2:12,16)」であるはずがないからだ。「飼い葉桶」は疎外と貧しさの徴であり、「布(おむつ)」は弱さの徴。そんな神の栄光(2:9)などない、と固く思っていた。

降誕の、この寄る辺なき飼い葉桶のイメージは、イエスの生涯をも貫いている。旅人のように生きたイエスは、自らを「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない(9:58)」と述べている。救い主の降誕とその生き方をこうして眺めてみると、世のどんな場に救いの御子をお送り下さっているか、なんとなく想像できる。自分の事として考えれば、私自身の「どこに」御子がやって来て、私自身の「どこで」出会うのか、その当ては冷静に省みれば案外分かるだろう。

羊飼いらは、救い主降誕の出来事のみを聞いた(2:10~12)。ところが彼らは話し合い、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか(2:15)」と、今すぐベツレヘムへ行くことを最優先にした。私たちも今、降誕の出来事を聞いている。だから羊飼いのように世の諸々は後回しにして、「さあ、ベツレヘムへ行こう」と出発したい。ベツレヘムはどこにあるのか。私たちのベツレヘムは地図には載っていない。ベツレヘムとは、教会の案内板にあるような社会奉仕や平和運動の類に限定されない。ベツレヘムとは、皆さん一人ひとりの暮らしと共にある「場」ではないのか。そこで真剣にむき合うべき「飼い葉桶」こそが、皆さんのベツレヘムではないだろうか。

自ら行動し、降誕の御告げを確かめた羊飼いらは「神をあがめ、賛美しながら帰って行った(2:20)」。牧羊仕事に戻るにしても、彼らはもう虚ろ(2:8)ではない。神の光を自らの目の光にして(詩編 19:9)、牧羊に精出すだろう。「羊飼いたちの話を不思議に思った(2:18)」人々には、その話を疑いながらも、どこかに「ひっかかる何か」を予感してほしい。そしてもう一人、重要な人物に触れないわけにはいくまい。「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた(2:19)」。

救い主を産んだマリアは、夜中の羊飼い登場に驚き、来訪の経緯を聞いたか。受胎告知から始まる一連の出来事(1:28~)をすべて心に納め、理解せぬまま、だが拒絶せず、無理に納得したりせず、自らの心が変化するままに柔らかく「思い巡らしていた」。降誕に関連して、羊飼いの歩み方は手本となろう。またマリアのように到着点なしに「思い巡らせる」ことも、案外大事な信仰の手本ではないか。



【おまけのひとこと】

さあベツレヘムへ行こう と立ち上がったものの どの方向へ歩き出すのか 北の森か 南の野か  
 どこでもいい 青い鳥は家にいたのですと なるにしても 旅してからでなければ見つかるまい